

イーハトーヴ世界の創造：宮沢賢治の体感した空間

人見, 千佐子 / HITOMI, Chisako

(発行年 / Year)

2014-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第330号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2014-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010258>

「イーハトーヴ世界の創造 ―宮沢賢治の体感した空間―」

人見千佐子

宮沢賢治はイーハトーヴという独特な世界を構築した。それは日本とも外国とも区別のつかない場所、それ以前に国境など存在しないかのような民族と文化の混在する場所である。本論文は主に東京、浮世絵、ユートピア、エスペラント語、四次元の五つの視点からイーハトーヴの成り立ちにせまり、いかに賢治がこの世界を創造するに至ったかを明らかにするものである。

序章

2011年の東日本大震災を経験した現代の私達は、直後から賢治の『雨ニモマケズ』が何度も取り上げられたことを記憶している。いったいなぜ世界同時発生的に取り上げられたのであろう。そこには多くの場所で多くの人に選ばれるだけの何かがある。東北出身の詩人、無私を貫いた偉人などという理由では説明し尽くせない、他の詩にはない何かである。本論はイーハトーヴの本質、という大きな問いに取り組むものであるが、同時にこの「何か」を探す旅でもある。混沌とした現代社会の多様になりすぎた価値観の中で、私達が向かうべき理想はどこにあるのだろうか。その理想の必要性が徹底的に純化された一時点が、先の震災だとするならば、その時に求められたものこそ答えなのではないか。人々がなりたいのは、『雨ニモマケズ』の中の無私の自分であり、その根底にはイーハトーヴの世界観に身を浸したいという願望がある。静かに全てを受け入れる「ワタシ」は悲しみを乗り越えていく目指すべき自分の姿であり、過多でないその願いは疲れた心と体に優しく寄りそう。イーハトーヴはそのような人々を優しく包み込む空間となり、人々の心の辿りつきたい場所となるのではないだろうか。

賢治が経験した迷いのあとを、追体験することで、その全容も明らかになるだろう。イーハトーヴの本質と、賢治が人々に直観として与え続ける何かを探す旅の始まりである。

第1章 賢治のみつめた東京

賢治の体感した空間として、東京の役割を分析することは重要である。東京で賢治が吸収したもの、その一つに明治以降急激に流入し始めた西欧文化がある。憧れつつも海外渡航の経験のない賢治は、東京を通してヨーロッパやアメリカを見つめていた。

花巻に生まれた賢治は、宮澤マキの一員として注目を浴び続けてきた少年時代までの自分の立ち位置、アイデンティティといったものを、東京に来て初めて外側からの目により認識しえた。花巻での重苦しい地縁、血縁から解き放たれたという一時的な感覚は賢治を十分に高揚させ、都会に出たばかりの若者にありがちなアイデンティティの変換の欲望を促していったであろう。新しい文化や思想を取り入れるなら西欧のものであるという時代、それが海外渡航への原動力となった同時代の人々と賢治との決定的な違いは、東京をみつ

めた向こうに見える西欧の見え方であり、童話の市場として世界全体を狙ったエスペラント学習であり、一時的にでも花巻から離れ、地縁から解放されたいという強い願いであったのだ。

しかし憧れていた東京もいつしかその本質が目につくようになる。東京の向こうに見えていた世界もまた近代文明の行き詰りという半面が見えてくると、相対的に故郷花巻を違った形で映し出していく。東京という都市の空間と、花巻という農村の空間、その二つが新たな価値観で賢治の目に映る時こそが、もう一つの空間であるイーハトーヴ世界の構築の第一歩なのであった。

第2章 賢治と浮世絵

浮世絵の世界を一つの創造世界と捉えたと、時をこえ、海を越え、その価値が再発見された過程はイーハトーヴ創造にも大きく影響した。賢治が浮世絵において特に着目したのは、その創造世界の特異性である。賢治は浮世絵を見て感じたものを五感に置き換えながら言語化していった。例えば詩『浮世絵展覧会印象』では、浮世絵世界から伝わる、音、空気の震えや動き、香り、手触りというようなものを、現実世界の浮世絵観賞者たちが直接的に受け取っている様子を描きだすことに心をくんでいる。また賢治は時間の経過そのものも浮世絵世界の一部であると考えていた。つまり光による褪色や紙の劣化といったことに象徴される時間の流れが、あらかじめ浮世絵作品とその世界に組み込まれていると考えていたのである。イーハトーヴの作品群が時間を経て多くの人々に支持されていくことは、当時の賢治からすれば希望というよりも確信に近いものがあったが、これら浮世絵の世界観と同じ観点からイーハトーヴ作品をみれば、鑑賞者及び時間に関わる変化そのものを作品の中に取り込んでいく手法は実に興味深いものがある。

東京に対しての態度同様、自分の存在するところに欲する空間を引き寄せ、外国の見方をも意識せずとも取り入れる、その方法は図らずもイーハトーヴを構築する一つの枠組みへとなっていった。賢治の中では実際に見聞きしたものと、書物等から得た知識とは同じレベルで存在するかのようである。頭に思い浮かべたことがそのまま現実である、という特有の考え方は、海外に対する眼差しとも、イーハトーヴを構築する方法とも共通する。さらに賢治は浮世絵に対して、生活に結びつく芸術という視点を持っていた。これは日本国内への視線だけでは気づくことのできないものであり、西洋の収集家たち、例えば建築家のフランク・ロイド・ライト（1867-1959）を始め、サミュエル・ビング（1838-1905）、エドモン・ド・ゴンクール（1822-1896）らが魅せられた浮世絵の単純性や神秘性とも通じるものである。この海外に近い賢治の視点は同時代の作家たち、永井荷風や太宰治、泉鏡花らが扱った作品題材としての浮世絵との比較によりきわだつことになる。それはやがてアーツ・アンド・クラフツ運動やトルストイの芸術への考え方なども含めて化学反応を起こし、賢治の羅須地人協会の設立目的とつながっていくのである。

第3章 イーハトーヴとユートピア

賢治のイーハトーヴの世界及び羅須地人協会は、トルストイの農地解放、イワン王国、モリスのユートピア、アーツ・アンド・クラフツ運動と比較することにより、その独自性がより際立つこととなる。それらは次の三点にまとめることができる。

①ユートピア思想の欠如

モリス、トルストイの創造世界と賢治のイーハトーヴが決定的に違っているのは、理想を純化させた世界ではない、ということである。そこにユートピア世界を描くことは可能だったかもしれないが、賢治はあえてそうしなかった。農民の生活を同じ目線で理解するという事は、実践という責任をもって未来をつくる手段が必要であった。賢治は農民に寄り添い共に生きる視点で、問題点も含めユートピアには描かれない細部を丁寧に表していった。

②都会と田園の認識の差異

ユートピアにおいて人は都会から田園へと移動し、都会のルールを持ち込んだ。賢治の羅須地人協会においては、あくまでも土着の人々を対象にしており、賢治自身も土地の出身者である。都市の人々が農村を都市化するのではなく、農村に根差した無理のない方法で、人々に寄り添いながら、都市の持つ利点を取り入れて行く方法をとった。それは農民たちが自ら学び合い、変化していく道であったのだ。

③商業と貨幣への認識の差異

イワン王国やモリスのユートピアにおいて貨幣は本来の意味を持たない。物々交換、自給自足といった考えは、トルストイやモリスからの影響と考えられるが、賢治の羅須地人協会では次第に逆の方向へと傾いていく。農民が農作業の合間に創る製品を商品化し、貧窮に対する即効性への期待を前面に押し出すのである。『ポラーノの広場』の中で描かれた成功は、羅須地人会の具体的活動の目論みであった。イーハトーヴにも貨幣を獲得する手立ての道筋をつけることが必要であった。何より夢想世界イーハトーヴはどこにもない世界ではなく、今ある岩手が基盤にあることを大前提としていた。その意味で賢治は現実を見つめながら、理想の世界というよりも、人々の暮らしが楽になるような空間を作り出そうとしていた。

イーハトーヴは楽しく幸せなだけの空間ではない。農村部へと流れ込む近代文明は、様々な形で住人達の生活を脅かす。モリスは『ユートピアだより』において、嫌悪する近代文明の時代を既に過去のものとし、理想的世界の時代への過渡期をすでに終わった物として物語の中に畳みこんでしまった。一方賢治は、そのモリスが畳みこんだ部分を一つ一つ丁寧に描いていった。現実を書き遺す方法をとったのである。しかし賢治の作品においては単なる近代文明批判にとどまることはなく、むしろその向こうにある時間と思索に導かれるべき世界への移行に重点を置かれている。そこへたどり着くまでの道もやはり厳しく辛い。しかしその先を見る感覚は現代の我々の視点とも、もっと先の未来の人々の視点とも重なるものである。

第4章 イーハトーヴの言語と時空間

言語と時空間はイーハトーヴの成り立ちを考える時、一つの国の使用言語と地理を考えるのと同様に重要である。イーハトーヴで使用される言語は基本的に日本語の標準語を中心としているが、岩手県地方の方言も含まれる。方言の使用は、都市と農村の問題も孕んだものでもあった。方言で書かれた童話は、何度かの原稿持ち込みにも関わらず鈴木三重吉の編集していた童話雑誌『赤い鳥』に採用されることもなかった。賢治はまた、童話をエスペラント語で発表することを目論んでいた。エスペラント語自体の持つ歴史がそうで

あるように、賢治は農村と都会の、そして日本と世界の間にある優劣関係の打破の可能性をそこに見出したのである。イーハトーヴの住民が言語によって自由かつ平等に意思疎通が可能になることは、イーハトーヴの持つ精神性を支える上でも必要であったと推測できる。

イーハトーヴ世界における空間のイメージは賢治の追求した四次元の世界と深く関わっている。それは当時流行したアインシュタインの相対性理論をはじめとする四次元の世界であり、ベルグソンの時間の観念論であり、最終的には妹トシが行ってしまった死の世界である。妹の死を受け入れるまでの賢治の迷いの日々は、賢治が見ていた時間と空間をそのまま言語化する方法を導き出した。その着地点としてある程度のまとまりを見せるのが、心象スケッチと呼んだ『春と修羅』に表されるような時間と空間の断片を積み重ねたモデルであった。賢治にとってその空間認識こそが最も自分の感覚に近いものであり、イーハトーヴ構築の際に共通する要素となっていた。

終章

常に悩み、苦しみを抱えながら生きていた賢治はただ苦しいと嘆くだけの人間ではなかった。彼にとって生きることとは実践すること、変化し続けることであった。賢治がその短い生涯を通して求め続けたのは、もう一つの空間、もう一つの言語を含むもう一つの世界であった。イーハトーヴは岩手県である。しかしそのものではない。愛着ある郷土でありながら、岩手の現在（大正当時）を含み、その過去も、やがて来る未来も内包する大きな時間的広がりを持つ、岩手の永久的空間世界である。トシとの死別からはもう一つの空間をつくりだした。岩手地方の農民の困窮からは、もう一つの社会を考えだした。方言のもつ劣性からもう一つの言語の習得をのぞんだ。自分という変化する存在自体もまた新たに創り出され、それら全てがイーハトーヴという創造世界に摂りこまれていく。

このようにイーハトーヴとはこれらの過程、賢治の苦しみから実践、独特の時間・空間把握へと続く一切を詳細に書き記した結果構築された、もう一つの世界なのだ。煤色のユートピアではない、何かを真似して作り上げたものでもない、イーハトーヴという名のその時自分の心に浮かび、リアルなものとして認識した、大正から昭和にかけてのあの瞬間の事実に他ならない。心象スケッチと呼んだ賢治の世界観は、『春と修羅』の制作過程に確立し、『注文の多い料理店』編纂時に花開く。一つ一つの花びらのような作品達は、まとめあげられた時に大輪の花を咲かせると同時に、それまでばらばらに機能していた賢治の感覚的・直観的心象世界を構築していく。それこそがイーハトーヴの持つ本質といえるのだ。